

令和6年度 第2回学校運営協議会 議事録

日 時：令和6年12月11日（水）10：00～12：00 （於 会議室）

委 員：6名（3名欠席）

参加委員：3名（過半数）で、本日成立。

●令和6年度進路状況について（進路指導主事）

- ・早い段階から大学受験を希望。無事に合格でき、大学に入ってから困った時どうするかとかいう話を、本人・保護者にしっかり伝えて送り出したい。
- ・いろんな入試方法があり、今後、大学進学希望者は増えていくのではと思う。多くの生徒が大学まで進むような時代になっている。
- ・最近の傾向として、自立訓練を選ぶ生徒が多い。今年度も半数（18名）の生徒が自立訓練に進む。

●学校教育自己診断アンケートについて（首席）

- ・回収率は児童生徒が22%、保護者が57%、教職員が100%。
- ・キャリア教育、進路に関する教育では、70%以上の肯定的評価が7項目、30%以上の否定的評価は0項目。
- ・保護者アンケートに関しては、全項目で70%以上肯定的評価となっている。
- ・教職員アンケートも同様で、全項目で肯定的評価が70%を超えている。
- ・自由記述では、担任の交代、PTA、学校が運営する学童幼児保育施設の新設など、今までにない記述が見られた。
- ・学習面ではICT活用の強化も挙げられている。
- ・行事では、参観方法の見直しや、運動会等の行事の必要性を投げかける言葉もあった。
- ・教職員に関し、業務改善・精選に関すること、児童生徒への指導、支援のあり方についての3点が挙げられた。

●教員間による授業見学週間のアンケート集計について（校長）

- ・前期授業見学、2回済。1年間で100パーセント目標だが、今回38件の回答。教員定数114名中、33%の回答。
- ・実質的に38名中、50%が『見学できた』という回答。他者の授業を見に行ける時間がない現状。
- ・映像で他者の授業を撮り、ハードディスクに保存して、それを見られるようにした。映像で見られたのが8名。38名の回答中、27人が『見た』の回答で、全体（教員数）114分の27。4分の1だった。
- ・見に行けない課題があるが、そこを100%にするには、工夫をして、3学期には互いに学び合えるような環境を作っていきたい。

●「時代のニーズに応じた授業づくり」について（校長）

- ・学びの方向性として、『主体的、対話的で深い学び』が打ち出され、他者との対話や共同により、『自分で獲得していく』『自ら見つけていく』その過程を重視するのが今の授業の在り方。
- ・支援学校（知的の支援学校）で、これをどのように取り組んでいくのかはまだまだ課題がある。
- ・1人1台端末の活用は、学びの方向性と合わせて学び方が重要。ICT機器は視覚支援等、障がいに対する支援に活用する。

- ・余暇の過ごし方を習得していくことが大事。また、獲得した知識を自分の生活に活かし、自分で総合して、課題解決に取り組んでいけるような力が必要。
- ・働き方改革として、教員主体の『こちらが教え込む』という授業から、『生徒が自ら獲得する』という方向の転換により、授業準備の軽減ができるのではないかと。主体的な学びの実現により、教え込む授業ではなく、言い換えると『教えない授業』なのかもしれない。
- ・教員の役割は、子どもが主体的、自発的に知識を獲得する過程の支援者となること。
- ・ICT 機器を活用し、パワーポイントのデータなどを共有する。ファシリテーターとして、授業の流れをある程度台本のようにパターン化し、その通りにやれば生徒は端末使って学んでいける。それが令和8年に作りたと言っている『吹田学びスタンダード』の趣旨。
- ・育てたい子ども像、めざすべき教師像としては、新しい学校のための『アップデート会議』を春から始め、夏には全体研修で、マインドシフトを目的に検証。
- ・新しい時代に求められる生徒像では、国際的な流れがあり、『エデュケーション 2030』というものが打ち出されている。世界的に求められている生徒像が、『Student（生徒）エージェント』として『自ら考え、主体的に行動し、責任を持って社会変革・実現していく姿勢・意欲』と文科省が定義付けた。
- ・より良い未来の想像に向けて変革をするということで、新たな価値創造や対立、ジレンマの折り合いをつけ、それを責任ある行動として実践していく。
- ・教員に必要な資質として、変革を起こす目標設定をし、振り返りながら、『学校を変えていける』『自分の授業を変えていける』『自分の教育観を変える』ということが今、学校で教員に求められている姿である。
- ・今までのPDCAに代わり、AARサイクルという瞬間的に見通しを持って、今すぐ変えていく、変革を非常に早いサイクルで行う必要がある。
- ・知的障がいのある支援学校の生徒たちが、この社会を変革していけるような人材、存在だという肯定的な人間観を持って、その可能性を否定しない教育観を持たなければならない。
- ・10月30日のアップデート会議ではテーマを3つ設け、グループ討議を行った。
- ・『教育課程』では、授業時間割、専門性向上、人材育成、地域連携などの観点で討議したが、考え方でなかなか折り合いがつかないというのが現状。
- ・授業のグルーピングや、授業時間（50分授業）など、来年度の方向性を提示する必要がある。
- ・授業改善、時間割、教育課程の改善では、学び方を変えていくことで、授業準備や授業展開の負担を軽減していきたい。
- ・学習集団としては、今まで個別に少人数でニーズに応じてやること（いわゆる個別最適な学び）が最上位だという考え方でやってきたが、果たしてそうなのか。
- ・発達段階や理解度で細切れにしていくのではなく、共同の中で生まれてくるのが共に学ぶということではないだろうか。
- ・支援学校の中のインクルーシブを目指し、学習集団をもう一度見直すことで、グループ数を削減する。
- ・教員の専門性を優先し、学年を超えて授業を持つことで、授業準備の負担軽減や授業内容の充実が実現できる。
- ・学年担任制導入に向けて検討中。少人数で最適な学習環境優先から、教員体制・教員集団の充実にシフトしたい。可能な限り、常時3人の教員体制を優先したい。今まで通り、4月当初に基本のクラス担任を指名するが、その裏ベースとして、学年担任制を敷いて、学年教員で学年生徒を見ていく。
- ・教員の状況の変化、子どもの状況の変化に敏感に、その都度フレキシブルに対応していきたい。
- ・分掌再編に向けても検討中。分掌長を減らすことで、持ち時間数を削減したい。

●「小学部授業見学」について（小学部主事）

- ・6年生の図工の授業では、14名の児童を7名ずつの2グループ展開で行っている。内容は、2グループとも同じ。
- ・授業の工夫点として手本動画を作っており、クオリティが高い。YouTubeのよう。
- ・児童はテレビや映像を見る力が日常から身に付いているので、とても有効な教材。工程がととても分かりやすく、配慮が素晴らしい。
- ・1、2、3、6年生が2グループに分かれており、4年生、5年生は各クラスで授業を行っている。グループやクラスは違えど、同じものを同じ内容で作っているため、授業（教材）準備としてもかなり有効。

●協議『時代のニーズに応じた授業づくりについて～個と集団へのアプローチ』

（E 委員）

- ・大学進学について、大学側からの支援依頼が増えている。多いのは、就活のタイミングでつまずき、学校のキャリアセンターから『対応しきれないのでお願いします』というようなパターン。
- ・他にも、3回生のタイミングで『インターンシップなどに行けていない学生がいるが、どうしたらよいか。』との問い合わせがある。
- ・新卒応援ハローワークで、障がい者の専門援助部門というのが今年から立ち上がっている。その学生支援に関しては、連携してやっていきたい。
- ・大学側は経営に厳しいというところで、障がいのある学生や、障がいと気づかずに大学まで進学して、高等教育に変わってからつまずきを感じ、そこで発達障害と診断されて…ということが増えてきている。
- ・大学進学自体は、本人・家族で決められて、すごく素敵なことだと思うが、その後（大学で）、どんな支援が可能なのか、対応してもらえるのかが不安。

（A 委員）

- ・医療系の大学では、国家資格を取るというのが最終的な目標。
- ・授業ではパソコンを使うが、試験の時も使わせてもらえないかと学生から申し出があった。
- ・他にも、みんなと一緒に定期試験を受けられない。個別でないと落ち着いてできないという学生もいる。
- ・大学側も障がいのある学生に対して、支援の経験がないため、『そんなことを認めてよいのか。』という意見が出て、どの範囲まで認めていくのかという課題がある。
- ・大学も今、生き残りが大変。学生をいかに集めるかというところがある。今後、障がいのある人たちに間口を開いていくというのは、すごく素晴らしいこと。
- ・ただ、それを引き受けるだけの支援ができる状態を、大学側が作らなければならない。
- ・大学に入ったけれど、途中で人間関係やいろんな事情で通えなくなってしまう、結果的に留年したり、退学したり…という部分が出てきているのが、現状でもある。

（進路指導主事）

- ・大学によっては、障がいのある方も受け入れている。ただ、『本人からの申し出がないと、基本的には何もしない』と、本人の意思に任されているというのも現状。

（A 委員）

- ・面接だけで合否が決まる入試もある。大学に入るまではよいが、問題は入ってから。高校のアフターとして、支援や相談を受けられる機会や、大学に相談できる環境が必要。

(E 委員)

・インクルーシブの学びというところでは、身体障がいの当事者から『支援学校で、個別の配慮に慣れている状態で社会に出てしまったら、配慮が基本的にされないというギャップで、うまくいかないパターンがある。』という話を聞いた。

・個別の配慮や合理的な配慮は必要だが、どこまでが合理的配慮で、先方がどこまで対応できるのかということも、小中高の中で学んでいく必要がある。

・集団での行動が多くなっても、個別で（自分で）考えていかないといけない。その決定が難しければ、小中高の間に集団で学びつつ、その中で自分に何が必要かというところを選択したり、経験したりしていく必要がある。

(進路指導主事)

・本校の職業コースで企業就職をめざして実習に出す生徒に関してこちらから申し出るのは、健康上の配慮点ぐらいで、他の細かいところは特に伝えていない。ただ、採用となると、伝えるべきこともある。

・どこまでが合理的配慮で、社会に出た時に、どこまでそれを分かってもらってできるのか。

(C 委員)

・小から中に入ることに何とも不安なことはない。ただ、社会に出ると、障がいを知らない人が大多数。たまたま融通が利いたということもあるかもしれないが、一般的には理解してもらいにくい。

・周りに配慮を求めるのではなく、世の中にはいろいろな子がいて、その都度その子も苦しい中で折り合いつけて頑張っているんだと、少しでも知ってほしい。

・自分の子どもが、どこだったらのびのび生きていけるかと考えてしまう。公共施設や公共交通機関で、ちょっとでも温かく見守ってくれたら嬉しい。

(A 委員)

・大学4年間は自分の充実した生活を送れたら、それに越したことはない。4年後、卒業する時にどういう進路を取れるか、今後の情報共有をお願いしたい。

(首席)

・自己診断アンケートは、基本的には google フォームでやっている。できるだけペーパーレスで保護者に配信している。回収率はこの3年間同じ平行線。

(C 委員)

・PTA 会員の中では、特にペーパーがいいか、google フォームがいいかという話はない。ただ、個人的な意見として、「今、時間ないからまた後で…」と思って1回閉じると、もう忘れてしまう。

(A 委員)

・先ほどの授業参観で、YouTube 並みの教材が使われていて、毎回すごく進化しているというのを感じる。

・保護者の立場としては、学級担任を固定せず、学年単位で全員を見て『今週は誰々が担任』というより、やっぱり担任の先生ははっきり決まっている方が安心感があるのでは。

(C 委員)

- ・幼児期にしっかり大人と関わることで、『大人は安心できるもの』という心を育てたい。子どもからすると『担任はこの人』『困ったらこの人』という方が理解はできそう。
- ・ただ、いろんな先生と関わった方が、いろんな大人がいるんだということを知ることができる。
- ・先生の立場から考えて、みんなで見守って、いろんな情報を共有して、いろんな意見が言えたり、心の負担が軽減したりするなら、複数担任の方がいいのかなと思う。
- ・保護者からすると、保護者の心の安定は、先生たちのおかげ。先生たちの心の安定がすごく大事。変に苦しくならないでほしいし、余裕を持って仕事をしてもらいたい。

(中学部主事)

- ・中学部は窓口制ではなく、ローテーションを組んでいる。1～2週間ごとに生徒の担当、連絡帳の担当を変えるのが基本ベース。3人の担任が8人の生徒を『みんなで見る』というスタイルなので、大きな変化はないと思う。
- ・ただ、圧縮すると、生徒同士の関係が難しい。あの子にとって、この子が起爆剤になったり、男女の関係で離れたりなど、思春期を迎える微妙な時期で、高等部に送るまでの真ん中の学部なので、クラス編成が難しい。

(A 委員)

- ・子どもたちの情報をしっかり共有するのは、すごくプラスの面がある。子ども同士の相性があるので、ゲーピングは配慮が必要。

(高等部主事)

- ・高等部も各学年3担でクラスが分かれているものの、スタンスとしては、学年の生徒情報を知っておくという意味で連絡帳を毎朝、できるだけ他クラス分も学年教員全体で確認をしている。
- ・担任同士の相性問題が色々な部分で出ている。

(E 委員)

- ・保育園は担任が誰か分からない。全員が自分の子どもを知ってくれている印象がある。小学校は、担任1人。それで、負担がかかって、先生がしんどくなるくらいなら保育園でやってくれているような、複数名でいろんな先生が、自分の子どもに関わってくれる状況の方がよいのかなと思う。
- ・実態として、先生方も自分のクラス以外の生徒さんのことを把握するようにしているのかなとは思っている。
- ・『この生徒の担当は、この先生』と決めて、双方に負担がかかるなら、分散できるようにするのも1つの方法。
- ・その先生がいなくなった途端、1つの柱がなくなってしまうという状況を考えると、複数で見ていた方が、親の立場としては安心できる。親によって、考え方が違うので難しいところ。
- ・教員側としては、複数担任の方が負担を軽減できるけれど、逆に、応援の教員として入っていると、『この子どうしてあげたらいいんやろう。』『この子、こうやってあげた方がいいのにな。』と思っても、担任教員に言えずに、悩むところもあるよう。
- ・そのバランスを取っていくのも難しい。担任が変わってしまっても不安というのもあるので、やめないための工夫として、『責任』や『負担の分散』というのをどのようにしていくのが課題。

(校長)

・保護者には事前に伝える必要があると思う。年度当初は通常と同じような体制を一旦打ち出すが、今後進めていくに当たって、趣旨と根拠をしっかりと示しながら、ご意見を募って、途中で反映していけるようにする。

(A 委員)

・支援の必要性や子どもたちの特性でグループを分けて、進める授業が多い。メリットはたくさんあるが、デメリットも今まで見えなかったことが出てくるのではないかな。

(高等部主事)

・課題が違うので、生徒の配慮を考えたとしても、どのようにして支援すればよいのかが難しい。

(A 委員)

・義務教育学校では、小学校の高学年から教科担任制を導入しているところもあり、7年生以降もスムーズに授業を受けることができているよう。

(中学部主事)

・小学部では、手厚くクラス制で授業しているところから、中学部では毎時間教員が変わる。教育相談でも、保護者がすごく心配されるところ。

・ただ、地域の小学校から来る子どもたちもいて、学年教員がいろんな授業を持つので、顔を知った教員が違う授業で会えるという点で、生徒が混乱することはさほどない。

・保護者にも協力していただいて、今までのクラス担任制から教科担任制になることは説明している。

(A 委員)

・義務教育学校のように、支援学校も同じ敷地内に小中高があるので、チャレンジしてもらいたい。だんだん時代も変わってきている。

・学校教育自己診断アンケートの中で、『校長先生が変わられるたびに、熱さが変わるのが不安』という保護者の意見も出ていたので、できるだけ丁寧にPTAと共有されて、ぜひ実現していただきたい。

●次回 令和7年2月5日(水) 10時～